■日常と「記憶」が重なるメモリアル施設 <①本事業の理解度や課題認識の適切さ>

震災当時、大きな被害を受けた土地から離れたこの場所に、メモリアル拠点を構えること。ここに震災を物語る「もの」を据えることは、かえって鑑賞者と震災との間に一定の距離を生む。そうではなく、震災の「記憶」を日常の地続きとして現前させることこそが、最もリアルなものとして知覚される。そこで、文字や音声、映像などの情報として「記憶」をデジタルアーカイブ化し、常に更新を続ける恒常的かつ流動的な「こと」として収蔵・展示する。それらを日常と接続するため、メディアの特性を活かし、**展示室に閉じることなく**「グラウンドホール」を行き交う人々の日常の中に投影する。震災における経験の深度によって、同じ展示に見て取る情景はそれぞれ異なる。この場を訪れ、自身の日常と「記憶」を重ね合わせることで、自らと震災文化との距離を再認識し、再接続することのできる場となる。そして、グラウンドホールを利用する全ての人々の記憶が重ね合わされ、新たなアーカイブとしてこの場に蓄積されていく。

■グラウンドホールが生む運営と建築の新しいかたち <①>

1) つなぎ手となるグラウンドホールとメディエーター

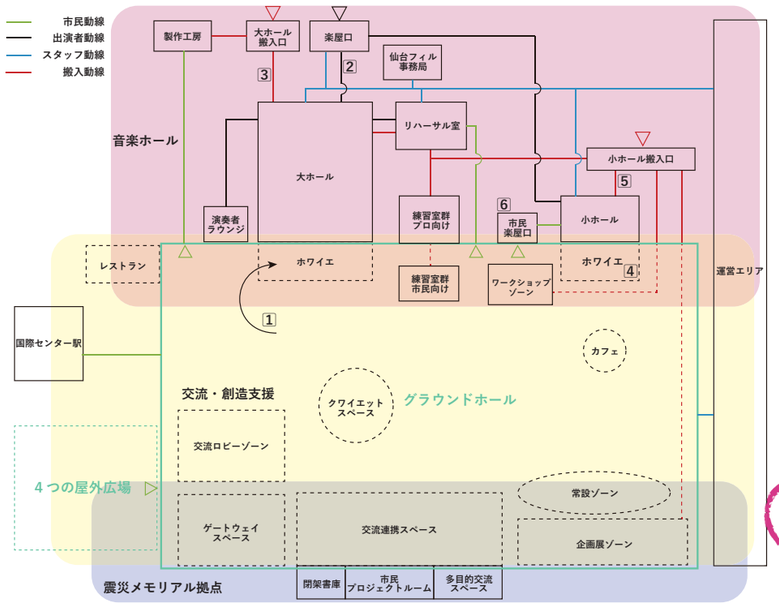
音楽ホールと震災メモリアル拠点、それらが一体となった交流と創造支援の場をつくるにあたり、適切な運営に基づいた建築のあり方を提案する。音楽ホール、震災メモリアル拠点にふさわしい人材に加え、それらの活動と市民とをつなぐ人材の三者が一体となった運営が、この施設には不可欠である。そのつなぎ手＝メディエーターには、人と人、人と音楽、人と震災をつなぎあわせる、交流と創造支援にふさわしい人材が求められる。そして、その運営を実現する建築には、音楽ホールと震災メモリアル拠点をつなぎ、交流と創造支援を生み出す広場＝グラウンドホールの存在が不可欠となる。街と地続きの穴で音楽・震災・交流と創造支援が響きあい、仙台市民が日常的に集う新しい複合施設が生まれる。

2) 明確な表裏と拡張可能性の共存

音楽ホールには表と裏がある。表には観客が集う客席やホワイエがあり、裏には演者とスタッフがつくり出す舞台や楽屋がある。「楽都仙台」と呼ばれるこの地には一流のプロフェッショナルが集まり、その演奏が一流であればあるほど、その表と裏には明確な区分けが要求される。一方で、市民の創造活動が活発になればなるほど観客と演者は入れ替わり、時には裏までが市民の活動場所へと拡張し、その表と裏は曖昧となる。その２つのあり方が、仙台市民のためのホールには必要とされることから、表と裏が明確な大ホールと、裏が表に拡張できる小ホールを提案する。

3) 柔軟性の高い創造支援エリア諸室

音楽と震災、市民とプロの場は、それぞれが専有するだけでなく、時によって共有・交換される。表と裏が明確な大ホールや運営エリアを除き、特に文化芸術と災害文化の創造支援エリアの各室を共有・交換することで、より活発な活動へとつながっていく。音を出したり、身体を動かすためのリハーサル室・練習室・ワークショップスタジオ、ものをつくるための製作工房・創作アトリエ、・工作工房などは、一体的な運営により、文化芸術にも災害文化にも利用可能な性質を持ち得る。メディエーターを中心とする融通の効いた運営により、活動にあわせて共有・交換できる創造支援エリア諸室を提案する。



・グラウンドホールは、地下鉄駅、バス、徒歩、車いす、自転車、自動車など、あらゆる手段・方向から容易にアクセスできる出入口をもち、周囲を取り巻く屋外広場や遊歩道につながる。

・大ホールは、グラウンドホールからホワイエ・客席に至る高揚感のある 1 観客動線と、舞台裏に至る効率的な楽屋口からの 2 出演者動線、専用搬入口からの 3 搬入動線をもつ。

・小ホールは、グラウンドホールとつながる 4 ホワイエ、表と裏が分離した出演者動線と 5 専用搬入口をもち、さらに市民利用の際にはグラウンドホールから直接舞台裏に至る 6 市民楽屋口をもつ。

・震災メモリアル拠点の発信エリアは、市民の日常的なアクセスが可能となるようにグラウンドホールと一体に計画される。創造支援エリア諸室は、プロ利用と市民利用が、状況に応じて分離、共有、交換が可能な観客・出演者・関係者・搬入動線をもつ。

■未来へつなぐ建築 <④施設の維持管理、長寿命化に係る考え方>

1) 敷地全体に生み出される半屋外スペース

気候が穏やかな時期、青葉山の南東や北西からの卓越風が周辺環境と地続きとなったグラウンドホールを抜ける。表裏のない配置計画とし、日陰を生み出す植栽や庇からなる半屋外スペースを敷地全体に巡らせることで、近年に気温上昇が見られる仙台においても心地よい環境を生み出す。

2) 大雨への備え

電気設備を地上に置く計画とする。ランドスケープにより土手を形成し、敷地内の排水計画と組みあわせ、建物ならびに周辺地域の冠水リスクを低減させる。

3) LCC の低減

LCC の低減のためには、新築・修繕・改修・維持管理それぞれに通ずる工夫が求められる。仕上げ・機械設備・電気設備を汎用品の組み合わせとし、交換可能でリサイクルできる部品・部材を選択する。また、平面的にも断面的にもゆとりのある計画とし、大規模改修などによる機能向上（社会的寿命の伸長）が実現できる設計とする。

4) 脱炭素社会実現の礎をつくる

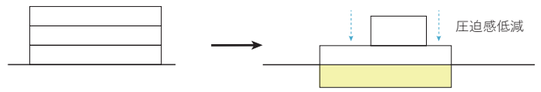
LCC の低減につながるエネルギーについては、建物外皮性能の向上（庇や駆体の高断熱化）・内部発熱の削減（機器の高効率化や排熱性能の向上）・高性能機器設備（設備容量最適化や節水機器）の組みあわせにより、ZEBReady および CASBEE：S ランクを目指す。

5) 創エネルギーの導入

大屋根は創エネの土台となる。竣工時は太陽光や太陽熱利用設備の必要最小限の導入を検討し、BEMS による運用実績のフィードバックにより、創造的な創エネ、蓄エネを目指す。

■床面積の最適化とコスト低減・立面計画 <②>

施設全体をつなぐグラウンドホールは十分な広さを有し、各機能をつなぐ移動空間を担うだけでなく、クワイエットスペースや広場、展示スペースなどを含み、時にホワイエともなることで、延床面積を最適なものに抑え、建設費の縮減を見込むことができる。また、建物ボリュームを抑えることで、青葉山に溶け込む建ち方を実現する。



敷地建蔽率 MAX
約 10,900 ㎡ ×3
≒ 32000 ㎡

グラウンドホールによって延床面積を抑える
→機能を損なうことなく建設費削減へ

建築面積	: 10,681 ㎡
B1F(グラウンドホール含む)	:10,458 ㎡
1F(一部グラウンドホール含む)	: 7,089 ㎡
2F	: 3,594 ㎡
3F	: 3,624 ㎡
延床面積	: 24,765 ㎡

(※緑化率 : 28%)

■設計料の考え方

基本設計設計料 :353,518,000 円 (税抜)　※あくまで参考額であり、交渉の際に相談可能

■結ばれていく未来のチーム <②業務の実施可能性や対応力、コスト管理力>

設計を進める中で、設計チームは拡張し、さまざまな専門家・技術者との協働により、幅広い知見と経験に基づく高い対応力をもつ体制へと成長していく。さらに、実際に運営するスタッフ、利用する専門家や市民と共に設計を進めることで、運営と一体となった施設の実現を目指していく。そんな設計と運営と利用がつながる未来のチームを構築して設計を進める。

プロポーザル時メンバー

意匠設計

前職・現職で国内外のプロジェクトを経験。協働設計者、協力チーム、施工企業の意見も踏まえ、全体の設計を取りまとめる。強いデザイン力で、これからの音楽ホール・震災メモリアル空間を実現。

ホール計画・展示計画

芸術文化施設の建築計画研究における第一人者であり、数多くの自治体で劇場・ホールや美術館・博物館の構想・設計・運営に関わっている。その経験を活かし、音楽ホールのみならず、メモリアル拠点についても、専門的知見をもって実現。

環境設計

デザインとエンジニアリングを統合する実践、なかでも建築の形態でエネルギーや CO_2 排出量を減らす知見を活かし、チームでの設計活動を円滑に進めていく。

構造設計

数多くの公共建築の実績と、意匠設計者との長年の協働経験を活かし、設計のプロセスに柔軟に対応しながら、難易度の高いホール建築のための構造形式を実現。

設備設計

幅広い用途の公共建築、大規模建築の実績を活かし、光、熱、風、機械設備と建築デザインを総合的に検討する。直近 2 年での 2000 ㎡以上の建築の ZEB 受注実績も複数有している。

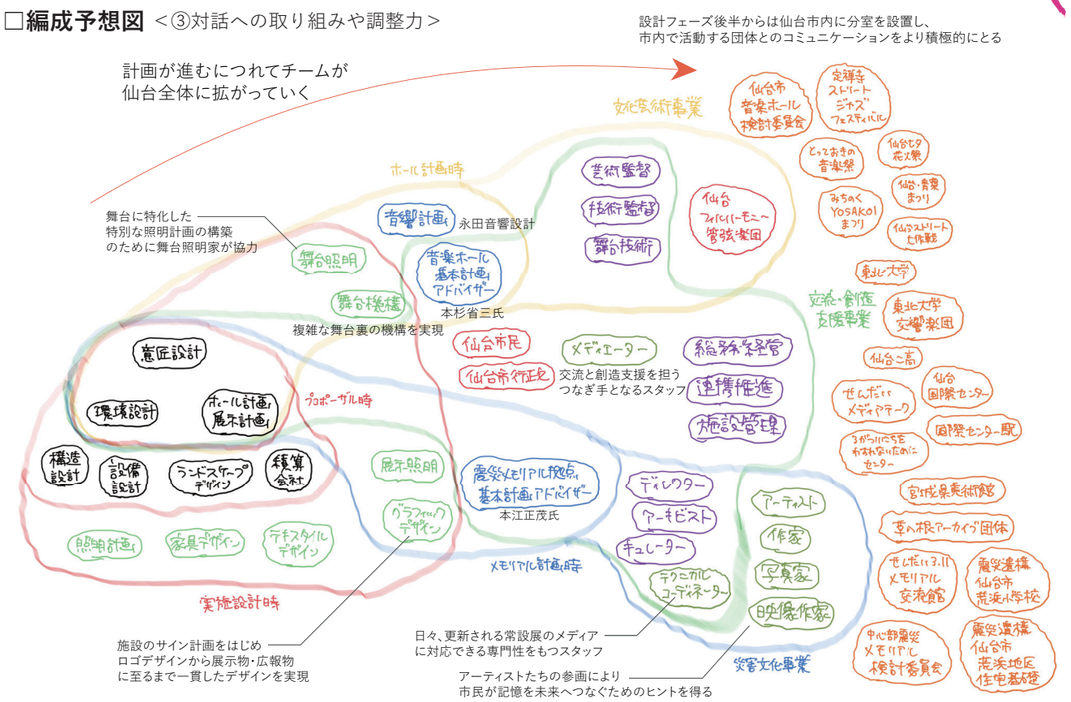
ランドスケープデザイナー

自然環境が育む植生を活かしたデザインを得意とし、青葉山の豊かな生物多様性を尊重した外構計画を実現。また、三陸地方での復興支援事業の経験を活かし、メモリアル拠点にふさわしいデザインを模索、実現。

積算会社

数多くの公共建築の実績を活かし、設計初期段階から設計者とコミュニケーションをとり、適切なコストマネジメントを行うことで、出戻りのない工程を実現し、コスト縮減に寄与させる。

□編成予想図 <③対話への取り組みや調整力>



■周辺環境との関係 <①>

1) 周辺環境と建ち方

大型の文化・教育施設が並び、自然が豊かに息づく青葉山と、音楽をはじめとした市民芸術が豊かな仙台の街。敷地はその結び目の位置にある。豊かな自然環境の中で、周囲に対して威圧的にならない建ち方が求められる一方で、市民が居場所として感じられるようなシンボル性が必要となる。

2) 青葉山の散策路として

周囲の歩道や桜の小径の豊かな環境を引き込み、敷地内の屋外空間を連続させることと同時に、建築内部空間もその散策路の一つとなり、誰でも気軽に訪れることのできる計画とする。

3) 動植物ネットワークの中継地としてのランドスケープ計画

広瀬川仲ノ瀬緑地と東北大学の緑をつなぎ、動植物の移動を疎外しないランドスケープ計画とするため、建物を敷地中央部にまとめ、敷地外周部を木陰の豊かな広場や遊歩道とした。